

# 東京箱根間往復大学駅伝競走出場競技者の キャリア形成に関する事例研究

—— スポーツを学問の対象としていくプロセス ——

根本 想<sup>1)</sup> 岡田 悠佑<sup>2)</sup>

## A Case Study on the Career Development of a College Athlete Who Participated in Hakone Ekiden:

The Process of Making Sport an Object of an Academic Discipline

So Nemoto<sup>1)</sup> Yusuke Okada<sup>2)</sup>

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the process of transitioning from an athlete to a researcher in the case of a runner who participated in Tokyo-Hakone Round-Trip College Ekiden Race.

For this study, data was collected using the semi-structured interview method, and analyzed using the Grounded Theory Approach. Here, the researchers found 7 categories: “Athletic experience as potential research themes”, “Going into a master course as a means to re-attempt teacher recruitment examination”, “Writing a master thesis”, “Going into a doctorate course as an alternative to other careers”, “Writing a doctorate thesis”, “Educator who works at a college or university as a sports science expert” and “Transformation of identity”.

As a result, the following points were clarified:

- 1) The idea that sport and science are two different things needs to be changed.
- 2) For former college athletes who have difficulty in transitioning into a career, long-term support is required.
- 3) It is an important task to consider concrete policies to support college athletes who aim for a career transition to researcher as a sports science expert.

**Key words:** Hakone Ekiden, college sports, Ph.D. (Sports Science), grounded theory approach

**キーワード:** 箱根駅伝, 大学スポーツ, 博士 (スポーツ科学),  
グラウンデッド・セオリー・アプローチ

## I. 問題と目的

東京箱根間往復大学駅伝競走、通称「箱根駅伝」は、日本の正月の風物詩の1つといえるだろう。箱根駅伝は、1920（大正9）年に第1回大会が開催され、1987（昭和62）年の第63回大会以降、

日本テレビ放送網によってテレビで生中継されるようになった。2018（平成30）年の第94回大会の視聴率（関東地区）は、往路29.4%（大会史上歴代1位）、復路29.7%（同3位）と高い数値を記録した（ビデオリサーチ, Online; YOMIURI ONLINE, 2018）。また、第94回大会では、青山

1) 育英短期大学非常勤講師

2) 早稲田大学スポーツ科学学術院研究助手

学院大学が総合優勝し、4連覇を果たしたことも記憶に新しいだろう。

視聴率や順位などの記録に一喜一憂するテレビ局や視聴者はさておき、箱根駅伝に出場している選手たちは、大学生アスリートであるという事実を見逃してはならないだろう。というのも、彼らは、競技者だけではなく、学生としての役割も果たさなければならない存在だからである。実際に、大学生アスリートは、学生と競技者という二重の役割を担うことによって、学業と競技活動の両立に問題を抱えているという（小野ほか，2017）。

とはいえ、大学生アスリートは、競技者としてのキャリアだけでなく、将来に向けてのキャリア形成を図っていくことも重要になることはいまでもないだろう。そのため、学業と競技活動の両立が困難な大学生アスリートに対して、キャリア形成支援を行うことは急務の課題といえよう。実際に、文部科学省が2017年3月に公表した「大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ」においても、大学生アスリートのキャリア形成支援の必要性について、以下のように述べられている。

学生アスリートにとって大学時代は競技力向上のキャリア面で重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身につけ、人間形成を図るうえでも重要な時期と言える。そのため、大学は学生が学業を修めスポーツでも活躍するための修学上の配慮をすると同時に、将来に向けたキャリア形成支援を行って社会に送り出すことが重要である（文部科学省，2017，p.12）。

しかし、先行研究では、大学生アスリートのキャリア形成支援を行っていく以前に、大学生アスリートが抱える特有の困難についても指摘がなされてきた。たとえば、Settles et al. (2002) は、学生と競技者という双方の役割を分離したものと認識している大学生アスリートが、低い健康状態にあることを明らかにした。また、大学生アスリートは、学生と競技者という複数の役割を担う

ため、一方の役割で生じたネガティブな状況や意識が他方の役割にネガティブな影響をおよぼすことも指摘されている（山田ほか，2009）。さらに、競技者としてのアイデンティティが強固であればあるほど、競技引退時のキャリア移行（career transition）に問題が生じやすくなることが示唆されている（豊田，1999）。

これらの指摘をふまえると、競技活動を中心とした生活を送っている箱根駅伝出場競技者（以下「箱根ランナー」と略す）のような大学生トップアスリートは、競技引退時にキャリア形成上の困難を抱えやすいことが示唆される。実際に、清水ほか（2016）によると、学生から社会人への移行を伴う大学生アスリートが、キャリア形成に大きな不安を抱えており、その中でも、競技力の高い大学生トップアスリートは、トレーニングによる時間的制約が引退後のキャリア形成の阻害要因となっているという。

上記の先行研究を概観すると、箱根ランナーを始めとする大学生トップアスリートが、学生と競技者という複数の役割を担うことによって、キャリアを形成していく上で問題を引き起こしやすい存在として位置づけられていることが読み取れる。さらに、先行研究では、そもそも学業と競技活動の両立自体が困難なものとして前提されていることが窺える。この前提には、おそらく、学業（学問）と競技（スポーツ）が性格を異にするものであるという認識があるように思われる。しかし、学業（学問）と競技（スポーツ）は、相反するものと言い切ることはできないのではないだろうか。というのも、スポーツは、学問の対象にもなり得るからである。つまり、大学生アスリートは、スポーツを学問の対象として、学業に励むことと並行しながら競技者としてのキャリアを形成していくことによって、学業と競技活動の両立を図ることも不可能ではないと考えられる。

現に、日本では、スポーツを学問の対象とした「スポーツ科学」を学ぶことができる大学・大学

院の数が200以上存在している（岡部，2016）。その中には、博士（スポーツ科学）の学位を取得できる大学院もある。つまり、日本の大学生アスリートは、大学卒業後、就職せずに大学院に進学し、スポーツを学問の対象として博士（スポーツ科学）の学位を取得することによって、競技者から研究者へと徐々にキャリア移行を果たしていく道も残されているのである。

しかしながら、これまでの研究では、箱根ランナーを始めとする大学生トップアスリートのキャリア形成の問題を考える上で、スポーツを学問の対象としていくことによって、競技者から研究者へとキャリア移行していくプロセスについて、その詳細を解明する研究はなされてこなかった。上述したように文部科学省が大学生アスリートのキャリア形成支援を行う必要性を明言していることに鑑みても、上記プロセスの解明は現代的意義を有した重要な課題として位置づけられるだろう。

以上より、本研究では、博士（スポーツ科学）の学位を取得した箱根ランナーを事例として、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」を明らかにすることを目的とする。

## II. 方 法

これまで、箱根ランナー当事者の視点から、データに基づいて、スポーツを学問の対象としていくプロセスを詳細に分析した研究は、ほとんどなされてこなかった。そこで、本研究では、研究対象者の主観的な体験や行為に対する意味づけに焦点を当て、雑多なデータから機能的に仮説や理論を立ち上げることによって、まだ十分に知られていない現象や人々の体験の特徴を探索的に知ろうとする場合に、特に有効性を発揮する（能智，2000）質的研究法を採用する。

質的データを収集する方法としては、既存の理論をいったん相対化した上で幅広いデータの収集

を可能にすると考えられることから、半構造化面接法を採用する。

半構造化面接法で収集したデータを分析する方法には、質的研究法の中でも手続きが体系化されており、研究対象とする人々の体験に即した形で当事者が用いている概念や諸特性を明らかにするのに適した方法である（能智，2000）ことから、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、“GTA”と略す）を採用する。

以下では、本研究の方法について具体的に記述していく。

### 1. 調査協力者と理論的サンプリング

調査協力者の募集は、著者の知人を介して協力を依頼する形を採用した。その結果、男性1名の調査協力者を得た。調査協力者の属性に関する記述は、倫理的配慮のもと、個人が特定されない程度の記述に留めることとする。

### 2. データ収集および倫理的配慮

先述のとおり、データの収集には、半構造化面接法を採用した。面接はすべてICレコーダーに録音し、筆者によって逐語記録を作成した。その際、人名はすべて匿名化し、個人情報保護に配慮した。逐語記録は、合計24,665文字であった。

データ収集の際の倫理的配慮として、インタビュー開始前に、本研究の趣旨、個人情報保護、録音許可、インタビュー中止の権利、研究協力取り止めの権利について記述した面接承諾書を読み上げ、調査協力者に署名してもらった。

インタビューでは、「これまでの運動部活動の経験」、「大学院修士課程および博士課程に進学した経緯」、「修士論文および博士論文の執筆過程」について、具体的なエピソードを交えて語ってもらった。面接時期は、201X年8月で、面接場所は、周囲の人に内容を聞かれることなく、落ち着いて話せる場所を調査協力者の意向をふまえた上で決定した。面接時間は、1時間44分46秒であった。

### 3. 分析方法の選択

上述したように本研究では、分析方法としてGTAを採用する。GTAには、いくつかの型がある(e.g. Charmaz, 2014; Corbin and Strauss, 1990; Glaser and Strauss, 1967; 木下, 2003, 2007; 戈木, 2008, 2016)。基本的な分析手続きは共通しているものの、本研究では、①質的なデータを切片化せずに、文脈をふまえた分析が可能となる、②手続きが体系化されている、③意味の選択的判断を行う人間(分析者)の主観の排除を目指さず、むしろ【研究する人間】として、分析全体の軸に位置づけている点に鑑みて、木下(2003, 2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下“M-GTA”と略す)を援用することとした。

### 4. 分析の手続き

本研究では、分析テーマと分析焦点者の2つの視点に絞ってデータをみていくM-GTAの手続きに則っていく。そこで、分析テーマを「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセスに関する研究」として設定し、分析焦点者を「博士(スポーツ科学)の学士取得者である箱根ランナー」とした。以下では、具体的な分析の手続きについて記述していく。

#### ① 概念の生成

逐語記録のデータの中で、分析テーマと関連していると判断できる箇所に着目し、分析焦点者にとってどのような意味を持つのか、という視点から、着目部分の意味を解釈した。そして、その部分を具体例として、他の類似例をも説明できると考えられる概念を生成し、名称と定義、具体例、理論的メモを分析ワークシートに記入した。その後、新たな概念の生成のための分析ワークシートを順次作成していき、それぞれの既存概念について具体例を追加していくとともに、具体例と概念の名称・定義の照合、対極例の確認を繰り返し、個々の概念の完成に向けた作業を進めた。

#### ② カテゴリの生成

自分が生成しつつある概念と他の生成途上の概念の関係を個別に見比べて検討し、概念のまとまりを作っていくことで、カテゴリの生成を行った。また、必要に応じてサブカテゴリを設けたカテゴリもある。

#### ③ カテゴリの相互の関連の検討

分析結果全体のコアが何になるかを検討しながら、データとの確認作業を行った。そして、何らかの重要な「動き」が捉えられているかどうかに注意を払いつつ、カテゴリの相互の関連の検討を行い、モデル図を作成した。

#### ④ 分析の質の担保

最終的に得られたカテゴリ、概念、およびモデル図が、データから離れたものとなっていないかをデータに立ち戻って繰り返し確認するとともに、【研究する人間】としての筆者の視点が恣意的なものとなっていないかどうか、複数の博士(スポーツ科学)の学位取得者による定期的な検討の機会を得た。

さらに、分析結果を調査協力者に送付し、結果図、カテゴリ、サブカテゴリ、概念、定義に誤認がないか、確認を依頼した。その結果、概念名と定義について若干の修正を行った。以上の手続きによって、本研究の分析結果は、調査協力者からの同意を得たものとなっている。

## Ⅲ. 結果と考察

分析の結果、7個のカテゴリ、8個のサブカテゴリ、37個の概念が生成された。カテゴリ名、サブカテゴリ名、概念名、定義は、表1のとおりである。なお、本文中において、カテゴリは《 》、サブカテゴリは〈 〉、概念は【 】、逐語記録のデータは斜体で示した。質的研究は、分析結果に研究者自身の解釈が含まれているため、結果と考察を分けて論じることは困難となる(木下, 2003)。そのため、本研究では、結果と考察を合



わせた形で記述していく。

表1のとおり、本研究の分析の結果、A《研究テーマの“種”としての競技経験》、B《教採リベ

ンジのための修士進学》、C《修論の執筆》、D《「後ろ向き」な選択による博士進学》、E《博論の執筆》、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》、G

表1 本研究で得られたカテゴリ、サブカテゴリ、概念、定義

カテゴリ名	サブカテゴリ名	概念名	定義
A 研究テーマの“種”としての競技経験		高校時代の部活動経験	高校時代の部活動での経験
		大学時代の部活動経験	大学時代の部活動での経験
		命がけの競技生活	「納得のいく結果が出せたら死んでも構わない」というメンタリティのもとで継続されていく競技生活
		封建的上下関係に対する懐疑	封建的な上下関係に耐え忍ぶような部活動のあり方に対して疑問を持つこと
B 教採リベンジのための修士進学		教採不合格という経験	教員採用試験で不合格の通知を受ける経験
		思考停止	何も考えられなくなる状態
		指導教員からの進学の誘い	指導教員から大学院進学への誘いを受けること
		教採へのリベンジ	教員採用試験の再挑戦を志すこと
C 修論の執筆	スポーツ科学に触れる経験	学会への参加	専門領域の学会へ参加すること
		専門的な授業	スポーツ科学に関する専門的な授業を受けること
	乱読体験	指導教員の全著作の通読	指導教員によって書かれた著書のすべてを通読すること
		目安としての指導教員の本棚	指導教員の本棚にある本を読むべき本の目安として用いること
	ゼミ	教科書の輪読	スポーツ科学の教科書をゼミで読み合わせる
		研究の進捗状況の発表	レジュメを用いて修士論文の進捗状況について発表すること
		厳しい指摘	主に指導教員から修士論文について批判的で厳しい指摘を受けること
		方向性の提示	主に指導教員から修士論文の方向性を提示されること
	自主ゼミ	ゼミの復習	ゼミで輪読した教科書を再読すること
		親学問の勉強	古典を用いて専門領域の親学問の勉強をすること
D 「後ろ向き」な選択による博士進学		非常勤講師経験による現実への直面	非常勤講師の経験を通して、学校現場の現実に直面すること
		教職に就くことへの不安	教職に就いて教員として働くことに対して不安を抱くこと
		就職氷河期	社会的な就職難の時期
E 博論の執筆	投稿論文の執筆	査読者による身になる指導	投稿した論文に対して、査読者から研究の発展につながり得る指摘を受けること
		研究会への参加	自分が所属していない研究室によって行われている研究会へ参加すること
		助手からの助言	助手自身の専門領域の視点に基づいた助言を受けること
		方法論に対する意識の高まり	自身の博士論文にふさわしい研究方法論を採用することの重要性について意識するようになること
	モチベーションの源	研究対象とのシンクロ	研究対象にシンパシーを感じる
修論の思わぬ反響		第三者から修士論文に対する予想外の肯定的な意見を得ること	
研究者の生き方モデルとしての指導教員		指導教員を研究者としての生き方の見本とすること	
投稿論文という関門の突破		博士論文の提出要件となる学会誌への論文掲載を果たすこと	
F スポーツ科学の専門家としての大学教員	他領域の研究者との交流	一般教養扱い	「専門科目」の講義を担当することなく、「一般教養科目」の講義のみを担当していることを理由として、「専門科目」の講義を担当している教員から、専門性の低い研究者として評価されること
		スポーツ科学についての説明	スポーツ科学以外を専門とする研究者に対して、自身の専門であるスポーツ科学の学問性について解説すること
		論考の執筆	依頼原稿や著書等の論考を執筆すること
G アイデンティティの変容	スポーツしかやっていないという意識	競技者としてのアイデンティティへの固執	「自分を自分たらしめているものが他でもない競技者としての自分である」という自己認識にこだわり、留まろうとすること
		競技者としてのアイデンティティに対する嫌悪感	「自分を自分たらしめているものが他でもない競技者としての自分である」という自己認識を拒み、憎悪すること
		競技者としてのアイデンティティの超克	「自分を自分たらしめているものが他でもない競技者としての自分である」という自己認識を乗り越えること
		研究者としてのアイデンティティの萌芽	「自分を自分たらしめているものが他でもない研究者としての自分である」という自己認識が生じること

《アイデンティティの変容》の7つのカテゴリが導出された。以下で、この7つのカテゴリの関係を簡潔に述べておく。

まず、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」において、A《研究テーマの“種”としての競技経験》が基盤として存在している。そして、B《教採リベンジのための修士進学》、C《修論の執筆》、D《「後ろ向き」な選択による博士進学》、E《博論の執筆》、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》の順に時が経過していく。最後に、BからFの過程を通して、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」において核となるG《アイデンティティの変容》が生じていく。以上のカテゴリ間の関係を簡潔に図式化すると図1のように示される。

以下では、AからGの順でカテゴリごとの分析結果を図で示しながら、それぞれのカテゴリのプロセスについて説明していく。最後に、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロ

セス」全体の結果図を示す。

### A《研究テーマの“種”としての競技経験》

A《研究テーマの“種”としての競技経験》カテゴリとは、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」において、研究の根本となる問題意識が、自身の競技経験によって、醸成されていくことである。ただし、研究テーマの“種”と表記したように、競技生活を送っている時点においては、自身の競技経験が研究テーマとなり得る可能性については、自覚されていない。

このカテゴリでは、下位概念として、【高校時代の部活動経験】、【大学時代の部活動経験】、【命がけの競技生活】、【封建的上下関係に対する懐疑】の4つが見出された。以上を図式化すると以下のようなようになる（図2）。

以下、図2を参照しつつ、A《研究テーマの“種”としての競技経験》カテゴリのプロセスについて説明していく。

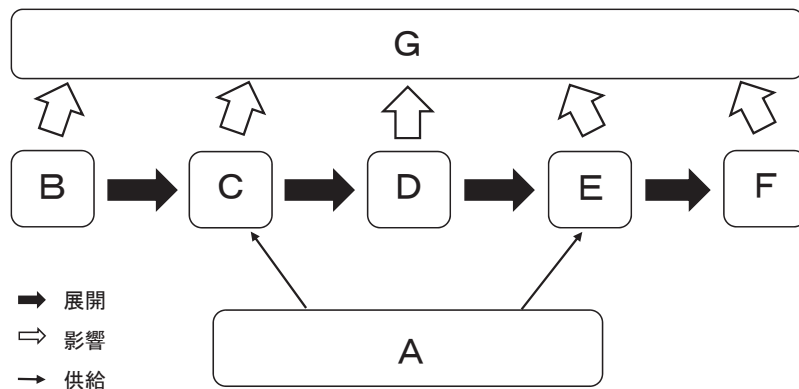


図1 カテゴリ間の関係の簡略図

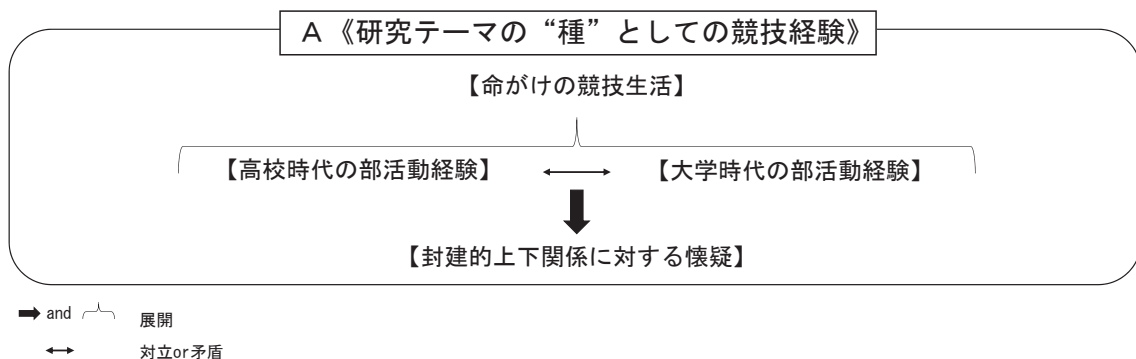


図2 A《研究テーマの“種”としての競技経験》カテゴリの結果図

まず、【高校時代の部活動経験】と【大学時代の部活動経験】は、常に、「納得のいく結果が出せたら死んでも構わない」というメンタリティのもとで送られる【命がけの競技生活】として経験されていった。その一方で、【高校時代の部活動経験】と【大学時代の部活動経験】との間に存在したギャップによって、封建的な上下関係に耐え忍ぶような部活動のあり方に対して疑問を抱くようになっていった（【封建的上下関係に対する懐疑】）。

以上のA《研究テーマの“種”としての競技経験》が基盤となって、以下のカテゴリのプロセスが進行していく。

### B《教採リベンジのための修士進学》

B《教採リベンジのための修士進学》カテゴリとは、教員採用試験に再挑戦するためのモラトリアム期間として、大学院修士課程に進学することである。このカテゴリでは、下位概念として、【教採不合格という経験】、【思考停止】、【指導教員からの進学の誘い】、【教採へのリベンジ】の4つが見出された。以上を図式化すると以下のような（図3）。

以下、図3を参照しつつ、B《教採リベンジのための修士進学》カテゴリのプロセスについて説明していく。

まず、学部生時代に教員採用試験で不合格の通知を受ける（【教採不合格という経験】）。その結果、「基本的にはもう何も考えてなかった」というように、何も考えることができない状態に陥っ

た（【思考停止】）。しかし、【思考停止】に陥っているタイミングで、ゼミの指導教員から教員採用試験のリベンジ期間として、大学院修士課程へと進学することを提案される（【指導教員からの進学の誘い】）。その結果、【思考停止】に陥っていた箱根ランナーは、心機一転して【教採へのリベンジ】を果たすために、修士課程に進学していった。

続いて、B《教採リベンジのための修士進学》カテゴリの次のステップとなる、C《修論の執筆》カテゴリのプロセスについて説明していく。

### C《修論の執筆》

C《修論の執筆》カテゴリとは、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」において、初歩のステップとなる、修士（スポーツ科学）の学位を取得するために修士論文を書き進めていくことである。このカテゴリは4つのサブカテゴリによって構成されている。第1の〈スポーツ科学に触れる経験〉サブカテゴリでは、下位概念として、【学会への参加】、【専門的な授業】の2つが見出された。第2の〈乱読体験〉サブカテゴリでは、下位概念として、【指導教員の全著作の通読】、【目安としての指導教員の本棚】の2つが見出された。第3の〈ゼミ〉サブカテゴリでは、下位概念として、【教科書の輪読】、【研究の進捗状況の発表】、【厳しい指摘】、【方向性の提示】の4つが見出された。第4の〈自主ゼミ〉サブカテゴリでは、下位概念として、【ゼミの復習】、【親学問の勉強】の2つが見出された。C《修論の執筆》

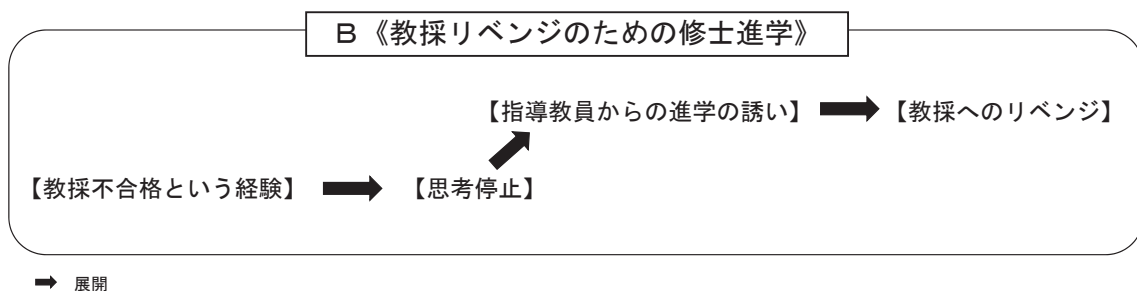


図3 B《教採リベンジのための修士進学》カテゴリの結果図

カテゴリを図式化すると以下のようなになる（図4）。

以下、図4を参照しつつ、C《修論の執筆》カテゴリのプロセスについて説明していく。

C《修論の執筆》カテゴリは、図4で示したとおり、〈スポーツ科学に触れる経験〉、〈乱読体験〉、〈ゼミ〉、〈自主ゼミ〉の4つのサブカテゴリが相互に影響しあって進んでいくプロセスである。それぞれのサブカテゴリについて、以下で述べていく。

〈スポーツ科学に触れる経験〉は、スポーツ科学に関する学会へ参加したり（【学会への参加】）、大学院で開講されているスポーツ科学に関する専門的な講義を受講したり（【専門的な授業】）することによって構成されていく。

〈乱読体験〉では、ゼミの指導教員によって書かれたすべての著作を通読したり（【指導教員の全著作の通読】）、指導教員の本棚にある本を読むべき本の目安として用いたり（【目安としての指導教員の本棚】）することで、時に「全然わかんねー」という状態に陥りつつも多くの書物に触れていく。

〈ゼミ〉では、レジュメを準備して、スポーツ科学の教科書を読み合わせたり（【教科書の輪読】）、修士論文の進捗状況を発表したり（【研究の進捗状況の発表】）する。そして、準備したレジュメや発表に対して、主に指導教員から、批判的で厳しい指摘を受けたり（【厳しい指摘】）、修士論文の方向性を提示してもらったり（【方向性の提示】）する。

〈自主ゼミ〉は、ゼミで輪読した教科書を再読したり（【ゼミの復習】）、古典を用いて専門領域の親学問の勉強をしたり（【親学問の勉強】）することによって構成されている。

続いて、修士（スポーツ科学）の学位取得後に博士課程へと進学するD《「後ろ向き」な博士進学》カテゴリについて説明していく。

#### D《「後ろ向き」な選択による博士進学》

D《「後ろ向き」な選択による博士進学》カテゴリとは、「後ろ向きな選択」によって、博士（スポーツ科学）の学位を取得するために博士課程へと進学することである。下位概念として、【非常勤講師経験による現実への直面】、【教職に就くこ

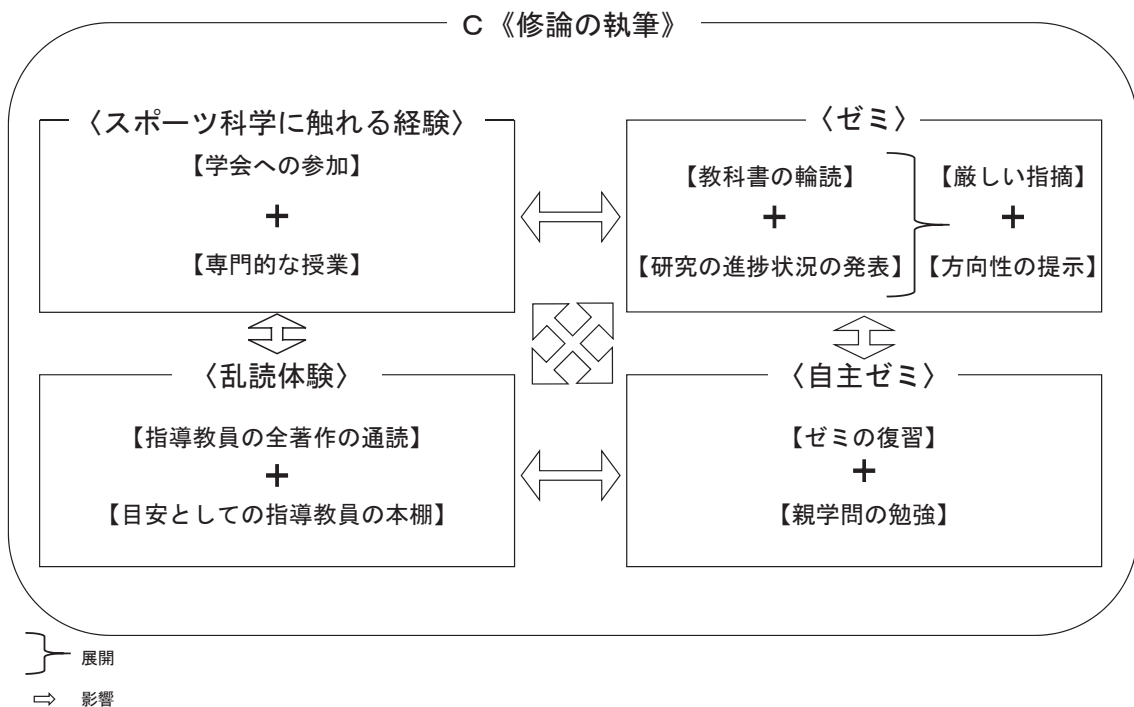


図4 C《修論の執筆》カテゴリの結果図



とへの不安】、【就職氷河期】の3つが見出された。D《「後ろ向き」な選択による博士進学》カテゴリを図式化すると以下ようになる（図5）。

以下、図5を参照しつつ、D《「後ろ向き」な選択による博士進学》カテゴリのプロセスについて説明していく。

まずは、博士課程へと進学する前に経験した高校での非常勤講師経験を通して、学校現場の「現実の厳しさ」に直面する（【非常勤講師経験による現実への直面】）。そして、教職を「生業」として「生きてくことにながりの不安を覚え」るようになっていく（【教職に就くことへの不安】）。さらに、当時の社会的な就職難（【就職氷河期】）も相まって、「博士、行くかあ」という形で、進学する運びとなった。

続いて、博士課程進学後に、実際に博士論文を執筆していくE《博論の執筆》カテゴリについて説明していく。

#### E《博論の執筆》

E《博論の執筆》カテゴリとは、箱根ランナーが競技者から研究者へのキャリア移行を果たす上で、1つのパスポートとして機能する「博士（スポーツ科学）の学位」を取得するために博士論文を書き進めていくことである。

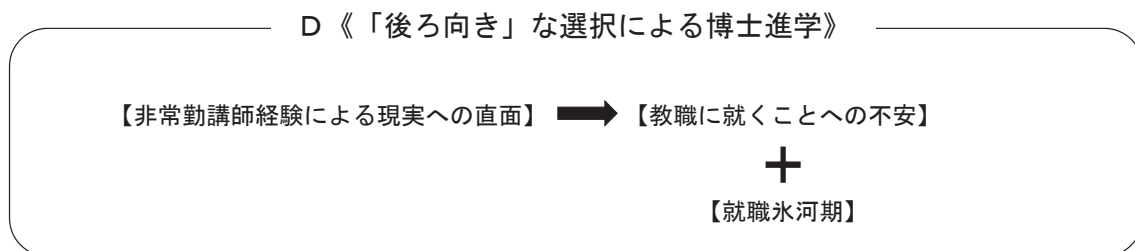
このカテゴリは8つの概念から構成されている。そのうち6つの概念は2つのサブカテゴリに含まれている。〈投稿論文の執筆〉サブカテゴリでは、下位概念として、【査読者による身になる指導】、【研究会への参加】、【助手からの助言】、【方法論

に対する意識の高まり】の4つが見出された。〈モチベーションの源〉サブカテゴリでは、下位概念として、【研究対象とのシンクロ】、【修論の思わぬ反響】の2つが見出された。そのほかにも、下位概念として、【研究者の生き方モデルとしての指導教員】、【投稿論文という関門の突破】の2つが見出された。E《博論の執筆》カテゴリを図式化すると以下ようになる（図6）。

以下、図6を参照しつつ、E《博論の執筆》カテゴリのプロセスについて説明していく。

博士（スポーツ科学）の学位を取得する上で、最大の関門となるのは、博士論文提出のための要件となる、学会誌への論文掲載を実現すること（【投稿論文という関門の突破】）であった。そのため、図6で示したように、E《博論の執筆》カテゴリにおいても、【投稿論文という関門の突破】が重要なゴールとして位置づけられている。

【投稿論文という関門の突破】を実現するためには、何よりも〈投稿論文の執筆〉をしなければならない。〈投稿論文の執筆〉は、所属研究室の助手から、助手自身の専門領域の視点に基づいた助言を受けたり（【助手からの助言】）、自分が所属していない研究室で行われている研究会に参加し、意見交換を行ったり（【研究会への参加】）、論文投稿後に審査結果として、査読者から今後の研究の発展につながり得る指摘を受けたり（【査読者による身になる指導】）することを通して、自身の博士論文にふさわしい研究方法論を採用することの重要性について意識するようになっていく（【方法論に対する意識の高まり】）。



→ 展開

図5 D《「後ろ向き」な選択による博士進学》カテゴリの結果図

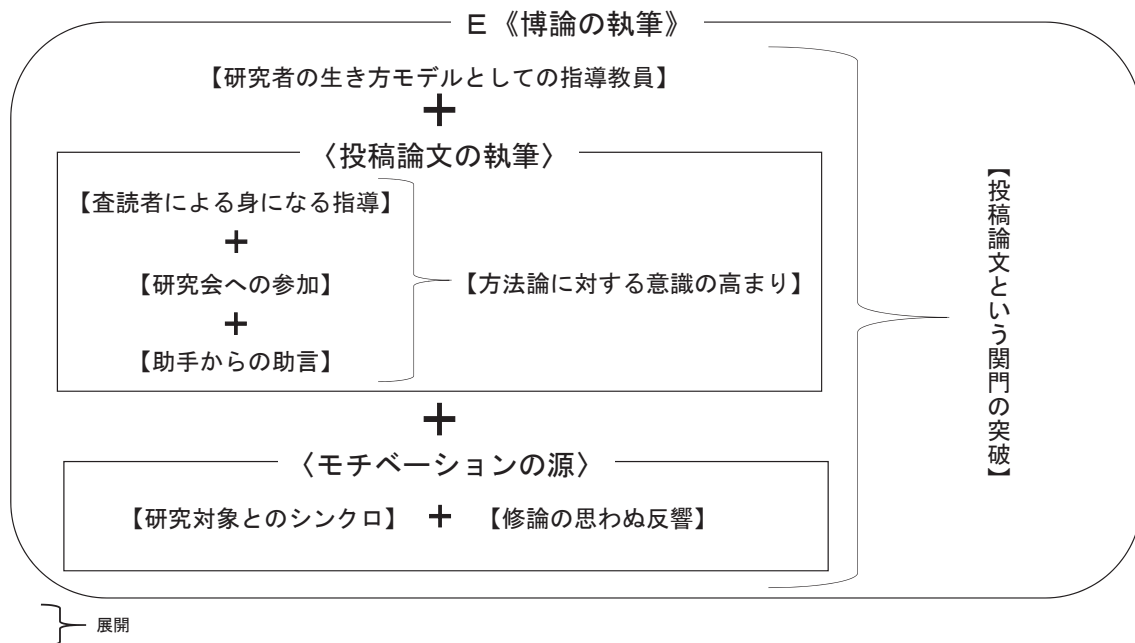


図6 E 《博論の執筆》カテゴリの結果図

また、【投稿論文という関門の突破】を実現する上での〈モチベーションの源〉として、研究対象と「シンクロする部分」を見出すことで「自己陶醉」に陥る経験や（【研究対象とのシンクロ】）、第三者から修士論文に対する肯定的な意見を得る経験（【修論の思わぬ反響】）が存在していた。

上記と並行して、博士課程の大学院生は、研究者へのキャリア移行を真剣に考えているため、修士課程の段階とは異なり、「研究者として生きてくつのはこういうことだつてことの1つのモデル」を指導教員に見出そうとする姿もみられた（【研究者の生き方モデルとしての指導教員】）。

続いて、博士（スポーツ科学）の学位取得後、箱根ランナーが、研究者へとキャリア移行を果たした後の段階であるF《スポーツ科学の専門家としての大学教員》カテゴリについて説明していく。

#### F 《スポーツ科学の専門家としての大学教員》

F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》カテゴリとは、スポーツ科学という学問領域の専門家として生計を立てている状態およびその自己認識を指している。このカテゴリは4つの概念から構成されている。そのうち2つの概念は1つの

サブカテゴリに含まれている。〈他領域の研究者との交流〉サブカテゴリでは、下位概念として、【一般教養扱い】、【スポーツ科学についての説明】の2つが見出された。そのほかにも、下位概念として、【論考の執筆】、【スポーツ科学で“飯を食っている”という意識】の2つが見出された。F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》カテゴリを図式化すると以下ようになる（図7）。

以下、図7を参照しつつ、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》カテゴリのプロセスについて説明していく。

研究者へとキャリア移行した箱根ランナーは、〈他領域の研究者との交流〉を行うようになる。そこでは、スポーツ科学以外を専門とする研究者に対して、自身の専門であるスポーツ科学について、「自分がどういう研究をして、どういう学問領域を拠り所としてるんだつていうのを説明」する経験がなされる（【スポーツ科学についての説明】）。その一方で、一般教養科目の講義のみを担当していることから、「大学でスポーツ科学を専攻してますつて言つても、ああ、あの大学の体育の先生ですつねつみたいな位置づけ」をされて、専門科目を担当する教員から専門性の低い研究者と

して評価される現状があった（【一般教養扱い】）。

また、研究活動として、依頼原稿や著書等の論考の執筆も精力的に行っている様子が読み取れた（【論考の執筆】）。

上記のプロセスを経ることによって、スポーツ科学という学問領域の専門家として「自分が飯を食ってるんだっていう」自己認識が生じる（【スポーツ科学で“飯を食っている”という意識】）。

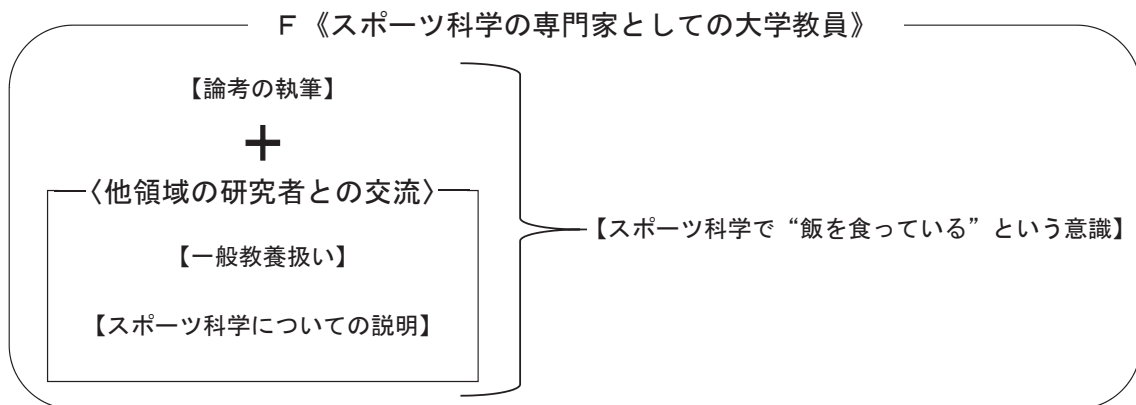
最後に、Aカテゴリを基盤として、BカテゴリからFカテゴリの順に進んでいくプロセスに影響を受けて発生するG《アイデンティティの変容》カテゴリについて説明していく。

### G 《アイデンティティの変容》

G 《アイデンティティの変容》カテゴリとは、

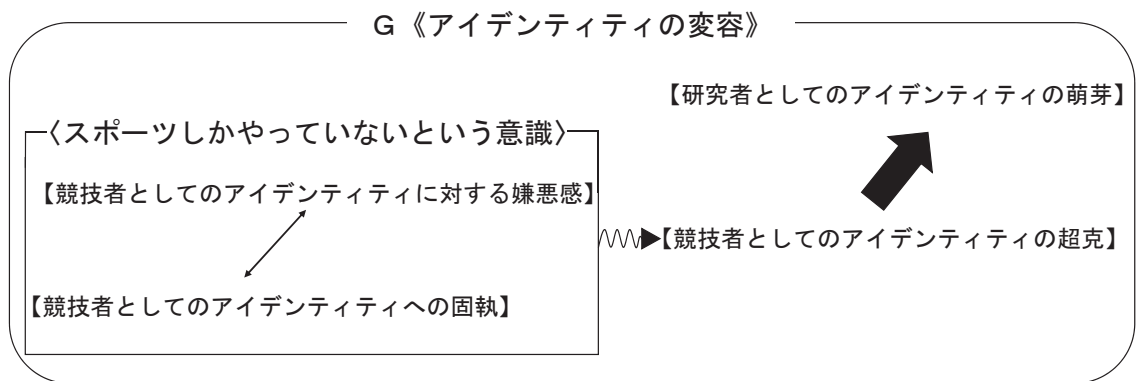
「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」において自己認識が変質していくプロセスである。このカテゴリは4つの概念から構成されている。そのうち2つの概念は1つのサブカテゴリに含まれている。〈スポーツしかやっていないという意識〉サブカテゴリでは、下位概念として、【競技者としてのアイデンティティへの固執】、【競技者としてのアイデンティティに対する嫌悪感】の2つが見出された。そのほかにも、下位概念として、【競技者としてのアイデンティティの超克】、【研究者としてのアイデンティティの萌芽】の2つが見出された。G 《アイデンティティの変容》カテゴリを図式化すると以下になる（図8）。

以下、図8を参照しつつ、G《アイデンティティ



展開

図7 F 《スポーツ科学の専門家としての大学教員》カテゴリの結果図



→ 展開  
〰️▶ 継続  
↔ 対立or矛盾

図8 G 《アイデンティティの変容》カテゴリの結果図

の変容》カテゴリのプロセスについて説明していく。

まずは、「今まで自分がスポーツしかやってきてない」という逐語記録のデータからも読み取れるように、箱根ランナーは、現役時代から一貫して〈スポーツしかやっていないという意識〉を持っていた。〈スポーツしかやっていないという意識〉は、2つの相反する概念間の葛藤によって、構成されていた。一方では、「結局、一番自分がこう、アイデンティティを自己認識できるっていうか、そういうものがたまたま自分の人生経験の中でスポーツしかなかった」ことから、「スポーツで自分が経験してきたことの中からしか、うん次の選択だったり、あの方向性を決めるっていうのはなかなか難しい」というように、競技者としてのアイデンティティに固執していた（【競技者としてのアイデンティティへの固執】）。他方で、「競技をしていることに強いアイデンティティを見出す」ことに対して、「気持ち悪いなあ」という感情も抱いていた（【競技者としてのアイデンティティに対する嫌悪感】）。

【競技者としてのアイデンティティに対する嫌悪感】を示しつつも、修士課程2年目の段階では、「競技者のアイデンティティはあったんだろうね、それはあった」というように、【競技者としてのアイデンティティへの固執】は、残存していた。ここから、C《修論の執筆》段階においても、〈スポーツしかやっていないという意識〉は継続していたことが読み取れる。

結局、競技者としてのアイデンティティは、「具体的に、なんかそのきっかけがあったっていうよりは、自分自身が競技とかスポーツから、あの、遠ざかって、わりとその、距離を置くのと並行して」乗り越えていったという。ここから、【競技者としてのアイデンティティへの固執】と【競技者としてのアイデンティティに対する嫌悪感】の葛藤を乗り越える上で、何か具体的なきっかけがあったわけではないことが読み取れる。

しかし、スポーツから距離を置く方法として、以下の語りがみられた。

やっぱ書いたり言葉にするってことはそれ、他者化するってことだからねえ。なんかこう自分の中の、何かを形にして、出したことである程度やっぱ、こう距離を置くっていうか、そういう感覚にはなってはきてたかなあ

つまり、競技者としてのアイデンティティは、1つの具体的なきっかけによってではなく、C《修論の執筆》、E《博論の執筆》、【投稿論文の執筆】、【論考の執筆】を通して、A《研究テーマの“種”としての競技経験》を「他者化」するプロセスを経ることによって、徐々に相対化され、乗り越えられていったのである（【競技者としてのアイデンティティの超克】）。

最後に、【競技者としてのアイデンティティの超克】を果たした後、研究者としてのアイデンティティが芽生えた（【研究者としてのアイデンティティの萌芽】）のは、「就職したのがいちばん大きいんじゃないですか」というように、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》となったことが大きく影響を与えていたことが読み取れた。

以上のAからGのカテゴリをふまえると、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」の全体は、以下のように図式化できる(図9)。

図9をふまえて次章では、総合考察を展開していく。

#### IV. 総合考察

本研究の目的は、博士（スポーツ科学）の学位を取得した箱根ランナーを事例として、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」を明らかにすることであった。その結果、箱根ランナーが、A《研究テーマの“種”としての競技経験》を基盤として、B《教採リベンジのための修士進学》、C《修論の執筆》、D《「後ろ向き」



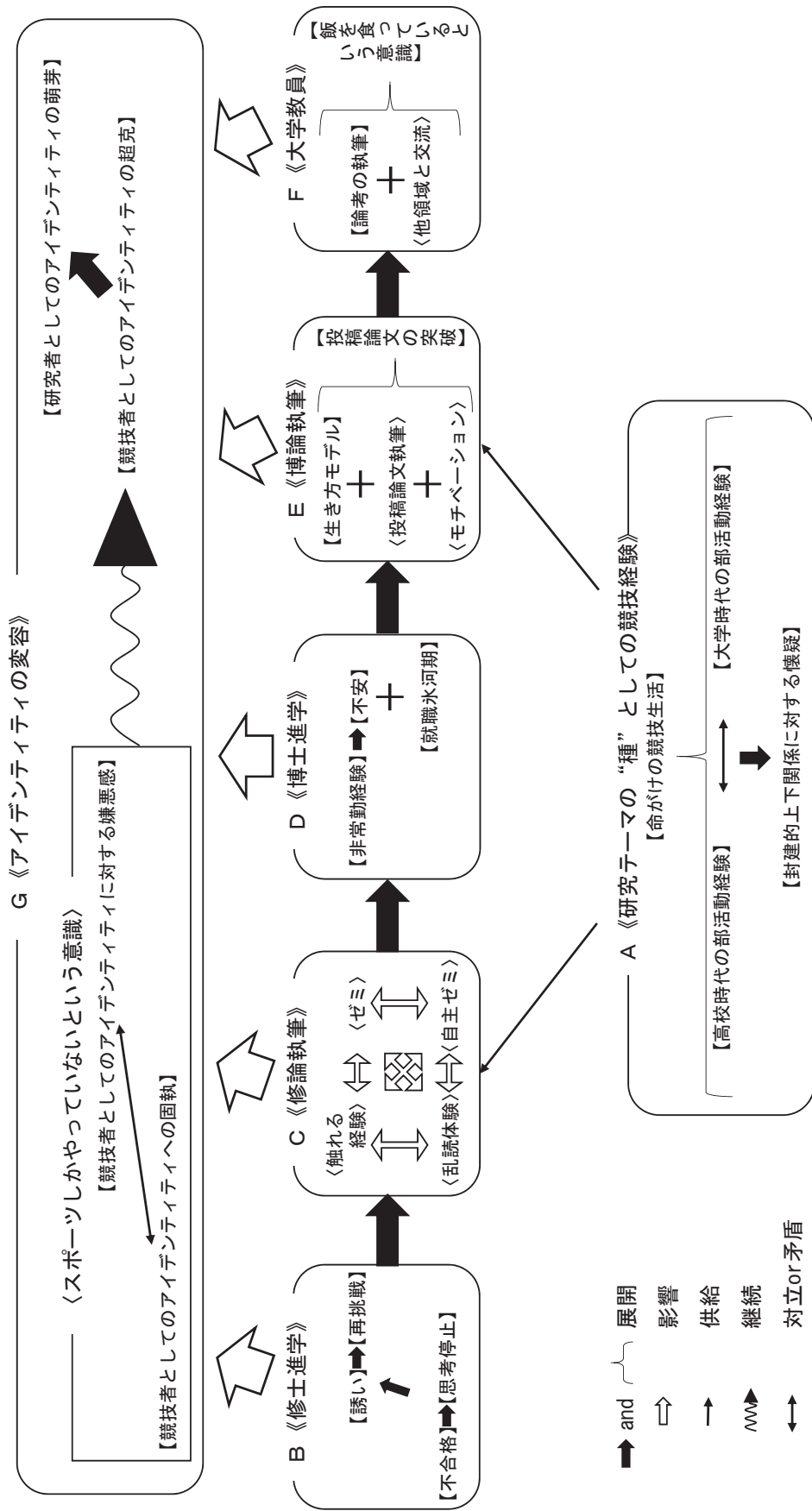


図9 「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」

な選択による博士進学)、E《博論の執筆》、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》になるといった経験を段階的に踏んでいくプロセスにおいて、徐々に、【競技者としてのアイデンティティへの固執】と【競技者としてのアイデンティティに対する嫌悪感】との葛藤を乗り越え、研究者としてのアイデンティティが芽生える（【研究者としてのアイデンティティの萌芽】）といった、G《アイデンティティの変容》を経験していたことが明らかになった。

以下では、改めて「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」について、順を追って確認していきながら総合考察を展開していきたい。

まず、A《研究テーマの“種”としての競技経験》カテゴリに着目していく。このカテゴリから、「箱根ランナーがスポーツを学問の対象としていくプロセス」において、【命がけの競技生活】そのものが、研究の“種”となっていたことが明らかとなった。この結果をふまえると、学問とスポーツはまったく性格を異にするものではないことが確認できる。また、スポーツは学問の対象となり、かつ自身の競技経験がキャリア移行を実現していく上での“種”にもなり得ることが読み取れる。そのため、スポーツが学問の対象にもなるということによって、大学生アスリートに対して認知させていくことによって、大学生アスリートの中で、学業と競技生活の両立に対する認識が変容していく可能性もあるだろう。また、【命がけの競技生活】を終えた後に、新たにキャリア移行のための準備をゼロからスタートする必要がないため、大学生アスリートからF《スポーツ科学の専門家としての大学教員》へのキャリア移行は、スムーズに行われる可能性も示唆されよう。

続いて、B《教採リベンジのための修士進学》カテゴリからF《スポーツ科学の専門化としての大学教員》カテゴリに至るまでのプロセスを経ることによって、徐々にG《アイデンティティの変容》

が生じた点に着目したい。大学院に進学してから博士の学位を取得するためには、一般的に、少なくとも5年の歳月が必要となる。この最低5年という歳月に鑑みても、〈スポーツしかやっていないという意識〉を持っている大学生アスリートが、【競技者としてのアイデンティティの超克】を果たした上でキャリア移行を実現していくためには、一定程度の時間を要する可能性が高いと考えられよう。したがって、キャリア移行に困難を抱える大学生アスリートの支援を行う際には、長期に渡るケアが必要となることも想定しなければならないだろう。

最後に、B《教採リベンジのための修士進学》カテゴリとD《「後ろ向き」な選択による博士進学》カテゴリのプロセスに着目したい。これら2つのカテゴリに着目すると、本研究の調査協力者の場合は、競技者としての現役時代からF《スポーツ科学の専門家としての大学教員》へのキャリア移行を考えていたわけではなかったことが確認できる。むしろ、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》へのキャリア移行を実現するきっかけには、【教採不合格という経験】や【指導教員からの進学の誘い】、さらに【就職氷河期】といった社会状況に左右されるなど、「偶然の産物」が大きく影響を与えていたことがわかる。つまり、調査協力者は、必ずしも自らの主体的な判断によって、F《スポーツ科学の専門化としての大学教員》へのキャリア移行を果たしたわけではなかったのである。

おそらく、【命がけの競技生活】を送り、〈スポーツしかやっていないという意識〉を持つ大学生アスリートが、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》へのキャリア移行という選択肢の存在を認知している可能性は低いだろう。そのため、スポーツ科学を専門とする研究者が、大学生アスリートに対して、大学院への進学も1つの選択肢として存在することを示唆していくことも、大学生アスリートのキャリア移行の問題解決の一

助となり得るかもしれない。しかし、それと同時に、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》へのキャリア移行には、時に「全然わかんねー」という状態に陥るような〈乱読体験〉をしたり、〈ゼミ〉での【厳しい指摘】に応答したり、【投稿論文という関門の突破】をしたりなど、決して簡単とはいえ、いくつものハードルを乗り越えなければならないことを伝えることも忘れてはならないだろう。

以上より、大学生アスリートのキャリア形成支援を行っていく上で、まずは、学問とスポーツが性格を異にするものであるという認識をリセットさせる必要があることが指摘できよう。また、キャリア移行に困難を抱えている大学生アスリートに対しては、長期的なスパンでの支援が必要であることも明らかになった。さらに、スポーツを学問の対象とし、F《スポーツ科学の専門家としての大学教員》へのキャリア移行を目指す大学生アスリートを支援するための具体的な施策を考えていくことが、重要な課題として位置づけられよう。

## V. 今後の課題

本研究で得られた知見は、1人の事例のみから導かれたものであった。そのため、箱根ランナー以外の大学生アスリートが、博士（スポーツ科学）の学位を取得して競技者から研究者へのキャリア移行を果たしていくプロセスについても、さらなる分析を行っていく必要がある。また、箱根ランナーのキャリア形成研究として、大学教員だけでなく、様々な職業に就いていった箱根ランナーを事例として、分析を重ねていくことも課題となるだろう。

## 引用・参考文献

- Charmaz, K. (2014) *Constructing grounded theory* (2nd ed.). Sage.
- Corbin, J. and Strauss, A. (1990) *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*. Sage Publications.
- Glaser, B. and Strauss, A. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine Publishing Company.
- 木下康仁 (2003) *グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践*. 弘文堂.
- 木下康仁 (2007) *ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリーアプローチのすべて*. 弘文堂.
- 文部科学省 (2017) *大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ：大学スポーツの価値の向上に向けて*. [http://www.mext.go.jp//sports/b\\_menu/shingi/005\\_index/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp//sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf), (参照日 2018年1月9日).
- 能智正博 (2000) *質的(定性的)研究法 仮説生成を中心に*. 下山晴彦編, *臨床心理学研究の技法*. 福村出版, pp.56-65.
- 岡部祐介 (2016) *スポーツ科学を学べる大学*. 友添秀則編, *現代スポーツ評論* 34. 創文企画, pp.127-140.
- 小野雄大・友添秀則・根本 想 (2017) わが国における大学のスポーツ推薦入学試験制度の形成過程に関する研究. *体育学研究*, **62**(2): 599-620.
- 才木クレイグヒル滋子 (2008) *実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ*. 新曜社.
- 才木クレイグヒル滋子 (2016) *グラウンデッド・セオリー・アプローチ 改訂版 理論を生み出すまで*. 新曜社.
- Settles, I.H., Sellers, R.M. and Alphonse D.Jr. (2002) *One Role of Two? The Function of Psychological Separation in Role Conflict*. *Journal of Applied Psychology*, **87**(3): 574-582.
- 清水聖志人・島本好平・久木留毅・土屋裕睦 (2016) *大学生トップアスリートの卒業後における雇用状態とライフスキルの関連：卒業後4年間に渡る縦断調査の結果より*. *スポーツ産業学研究*, **26**(2): 303-313.
- 豊田則成 (1999) *アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究—中期危機を体験した元オリンピック選手—*. *スポーツ教育学研究*, **19**(2): 117-129.

ビデオリサーチ (Online) 東京箱根間往復大学駅伝競走  
(日本テレビ)歴代視聴率【関東地区】. [https://www.videor.co.jp/tvrating/past\\_tvrating/marathon/02/index.html](https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/marathon/02/index.html), (参照日 2018 年 1 月 9 日).

山田泰行・岡康 大・川田裕次郎・水野基樹・広沢正孝  
(2009) 大学生競技者に生起するネガティブ・スピ  
ルオーバーと抑うつとの関連性. 順天堂医学, 55 :  
502-510.

YOMIURI ONLINE (2018) 箱根駅伝視聴率、往路は過  
去最高……復路歴代 3 位. 2018 年 1 月 4 日. <http://www.yomiuri.co.jp/culture/20180104-OYT1T50025.html>, (参照日 2018 年 1 月 9 日).

(2018 年 1 月 29 日受理)